

ART KISS
LETTER VOL. 57
2012初夏

巻頭言

手技が生み出すマチエールの美

形象、色彩、テーマが絵画を構成する主要な要素となるが、葉祥明に
関しては、マチエールがその魅惑の領域に加わる。マチエールは、
作品の肌触りであり質感であり、作者の観念と同時に物質の側面を
提示する。これは写真とか複製では再現が難しく、今回展覧会を
実現することにより、葉祥明作品の真の特質を鑑賞することが
可能となった。展示の段階で私は「Blue Stream」を実際に手に
とって、内容だけでなく、作品の持つ物質的な美しさと力に圧倒された。
実は私は、今までに作品の表面の衝撃力に2度遭遇している。

最初は、ロンドンのピクトリア朝の雰囲気濃厚な老舗画廊
アグニューズで見た、サミュエル・パーマーの水彩画であった。
パーマーは19世紀ロマン派の幻想的風景画家。描かれていたのは、
鮮やかな光に満ちた山と川の風景画。売りに出ているその作品を
実際に手に取り、目から数十センチ先の画面から放たれている
力は凄かった。幻視の風景である。卓抜な技巧で描写された表面
(マチエール)は、宝石のように輝いていたのだ。その作品はその後、
ワシントン・ナショナル・ギャラリーの所蔵となった。

もう1点は最近手にして見た現代作家青山悟の作品。旧式の
工業用ミシンで、気の遠くなるような時間を掛け制作された刺繍
作品である。技術・手法としては、レトロでローテク。しかし、
際立つ静謐な表面の美しさが、一挙に先鋭で現代的な印象を
与えるのが興味深かった。その極めて独自の質感は、写真や印刷物
では到底捉えられない。

葉祥明、パーマー、青山悟の三者に共通するのは、作品が概して
小規模であること。しかしそこに凝縮された内容は、緻密で壮麗、
限らない広がりをもつ。

熊本市現代美術館館長 桜井武

葉祥明展 一地平線の彼方へ—
2012年4月7日[土] — 6月17日[日]<http://www.camk.or.jp>

MUSEUM INFORMATION

2012 FEB - APR



No.056
**第3回オハイエクまもと
 とっておきの音楽祭**
 障がいのある人もない人も一緒になつて音楽やダンスを楽しみ、音楽の力で心のバリアフリーをめざす活動の一環として、2010年より始まった音楽祭。当館もその一会場となり、11時~14時半まで、13組130名の方が出演され、合唱やピアノ演奏などが繰り広げられました。会場も一体となった楽しいひと時でした。(Y・H)
 【参加人数150人】
 2012.3.25

ミュージック・ウェーブ
 展覧会や季節にあわせた
 コンサートを開催しています

詩の朗読会
 くまもと詩の朗読の会共催の
 自作の詩の朗読会です

テーマ「花言葉」

2012.3.18

今回は
 100回
 目の開催
 を記念し
 て、通常は
 第4木曜
 の18時か
 らですが、
 特別に「熊
 本の華人
 展」の前期
 の最終日
 の15時より行いました。飛び入り3名を含めた19名の方に詩作を発表・朗読いただきました。ポインセチア、かすみ草、コスモス、ふきのとう、松、にがよもぎ、つくし、野菊、ぼけ、のばらなど、みずからの想像を飛ばたかせる花、人生と深く関わりを感じる花などが詩作に表れていました。



3・11への追悼を花言葉で示したり、エロスを花を通じて表現したり、生きることと死ぬことの節目のあいまに、花が常に深く関わることを思わせる詩作もありました。萌いずる春、という季節だからでしょうか、枯れる花を題にした作品はなく、新しい季節を開花とともに待つような、晴れやかな第100回目の開催でした。(H・T)
 【参加人数30人】

井手宣通記念室

熊本出身の洋画家・井手宣通の
 作品を中心に紹介する展示室

ケロロ軍曹 吉崎観音原画展

2012.3.3-4.1



熊本ゆかりの漫画家・吉崎観音(よしぎき・みね)先生の大人気マンガ「ケロロ軍曹」の「宇宙初」となる原画展が井手宣通記念ギャラリーで開催されました。熊本のご当地ネタや名場面など、これまで公開されたことのなかったコミックの原画120点(前後期で60点を入れかえ)を展示したほか、仕事場の風景写真や描きおろし色紙、ぬり絵コーナー、また会場限定の加藤清正ケロロのポストカードも発売され、多くの子どもたちや家族連れ、ファンの方で賑わいをみせていました。(A・S)

井手宣通 生誕100年記念展示

2012.4.4-6.24

今年の2月に生誕100年を迎えた井手宣通の特別展示が始まりました。今回は井手の代表作7点を展示しています。祭りシリーズ、熱海の花火、熊本城など、鮮やかな色彩、躍動感のあるタッチの名作をお楽しみいただけます。(Y・H)

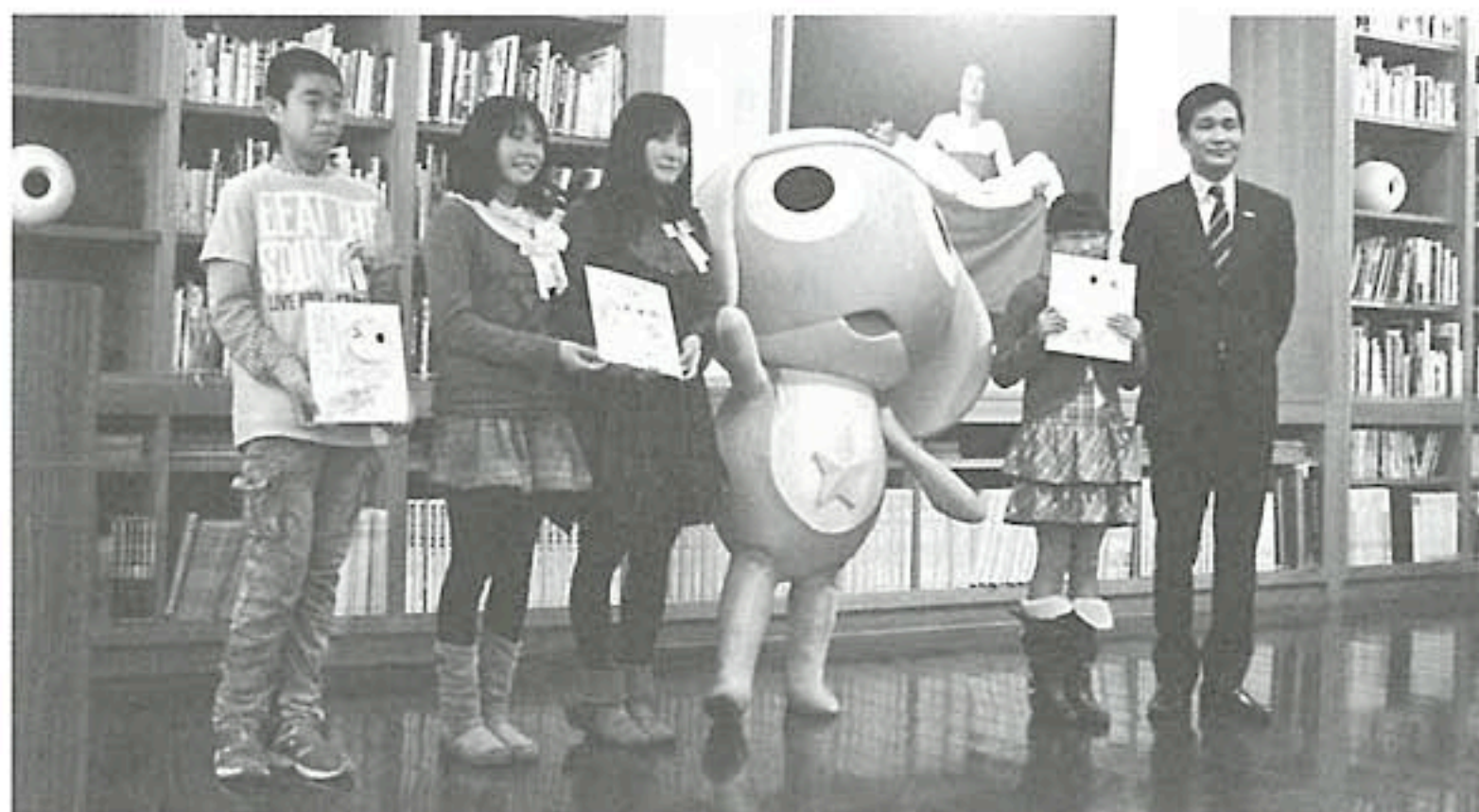
月曜ロードショー上映報告

毎週月曜日14時・18時より 無料

〈4月までの上映作品〉

2月6日	「若草物語」1949年 アメリカ映画 122分
2月13日	「私の恋」2007年 韓国映画 108分
2月20日	「いずれ絶望という名の園」2007年 フランス、ベルギー、ルクセンブルグ映画 98分
2月27日	「それを暁と呼ぶ」1955年 イタリア、フランス映画 98分
3月5日	「神々の王国」1949年 フランス映画 105分
3月12日	「85ミニッツ」2007年 コロンビア映画 85分
3月19日	「ポー川のひかり」2006年 イタリア映画 93分
3月26日	「河は呼んでいる」1958年 フランス映画 94分
4月2日	「子供の情景」2007年 イラン、フランス映画 77分

ケロロかわいかった!



階段ギャラリーでは、吉崎観音原画展にあわせて「イラストぬりえコンテスト」優秀賞など100点の展示が行われました。応募総数629点、韓国からも197点の応募があったそうです。どの作品もぬり絵だけでなく、楽しいイラストが丁寧に描きこまれていました。優秀作には熊本市長による表彰が行われ、吉崎先生の特製色紙がプレゼントされました。(A・S)

ケロロ軍曹 イラストぬりえコンテスト

2012.3.3-4.1

階段ギャラリー

県下の小中学校の作品を中心に紹介します

CAMKEESの活動

美術館ボランティア
CAMKEES(キャンキース)による活動紹介



CAMK「読みがたり」第30回 テーマ…「ファミリー」

2012.2.11

手遊び歌「おとうさんがかけてきては、親指から順番に指を立てて歌います。お兄さん指とお姉さん指がなかなか



CAMK「読みがたり」第29回 テーマ…「日本のおはなし」

2012.1.21

今回はお手玉を配り、お餅に見立てて、ついたり、丸めたり、頭の上のせて遊びました。また、人気のパネルシ



CAMK「読みがたり」第31回 テーマ…「外国のおはなし」

2012.3.10

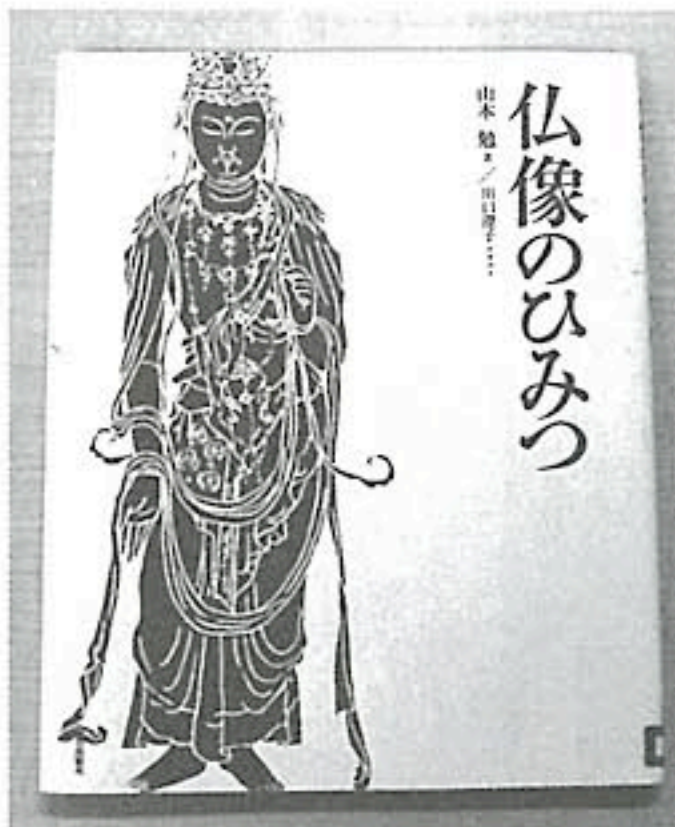
いろいろな国の動物の鳴き声を楽しめる絵本「うしはどこでも「モー！」をはじめる絵本「はらぺこあおむし」や、春らしくお花とつくしの手袋人形を使って手遊び歌をご紹介しました。また、エプロンシアター「おおきなかぶ」では、子どもたちといっしょに「うんとこしょー！どっこいしょー!!」の大きな掛け声で特大のかぶを収穫することができました。(C・T)

【参加人数16人】

ホームギャラリーからのお便り
ホームギャラリーから
おすすめの一冊をご紹介します。

vol.11

「仏像のひみつ」



山本勉著／川口澄子イラスト 朝日出版社 2006年

東京国立博物館で2005年に開催された「親と子のギャラリー 仏像のひみつ」展という展覧会の内容をもとに出版された本ですが、この一冊で、仏像の基本的なことが十分理解できる内容となっています。「仏像のひみつ」と題し、仏像の基本情報を4つに分類して、そもそも仏像ってなに？という問いをわかりやすくひも解きます。仏さまにも、人間社会のような組織があり、それぞれの役割があることや、仏像の体型も時代によって変わることなど、イラストや写真をまじえて、わかりやすく解説されています。子どもから大人まで、幅広い層に理解しやすい文章で、大人が読む仏像入門書としても活用できます。読み終わるころには、仏像のひみつを見つけに、仏像に会いにいきたくなりますよ。(N・H)

鶴田 一郎さん
オシャレでした！



GI
GII

鶴田 一郎講演会

2012.2.25



第23回アートパレードの審査員の鶴田一郎さんの講演会を開催しました。

まず今年のアートパレードの審査講評では、どの作品からも絵を描く喜び、パワーを感じ、自分の原点を思い出されたとお話されました。今回の入賞者は、それぞれが自分の何かを越えようと挑戦しているエネルギーを感じられたそうです。

続いては「越境する美と様式」と題して、天草での小・中・高校時代と絵の関わり、大学からフリーランス活動初期の苦楽、そして現在に至るまでの転機や、美人画としての新たな試みなどについて語って頂きました。(Y・H)

【参加人数80人】

熊本の華人展 vol.8 —花むすび—

前期 2012.3.16-18
後期 2012.3.23-25

当館の春の祭典、「熊本の華人展 vol.8」が開催されました。今年には花き生産者と消費者を華人によるいけばなによって「結ぶ」空間づくりを目指し、「花むすび」というテーマで企画しました。国内の生産高1位のカスミ草、2位のトルコギキョウをはじめ、



アリウム、カーネーション、バラを中心に生けていただいたコーナーでは、珍しい品種のトルコギキョウやカーネーションなどを使ったいけばなを楽しんでいただきました。

また、恒例のコラボレーションコーナーでは、今年10周年を迎える当館で、過去に開催された展覧会を25本選び、その展覧会をイメージして生けてもらいました。来場された皆さんにも、当館の歩みを感じていただけたらと思います。(E・Z)

「熊本の華人展」関連イベント 花き生産者に聞く、 熊本の花状況シンポジウム

2012.3.17



「熊本の華人展 vol.8」の関連イベントとして、「花き生産者に聞く、熊本の花状況シンポジウム」を開催しました。バラ、アリウム、カーネーション、トルコギキョウの生産者をお招きし、育てる上でのご苦労や工夫、その花の魅力などを語っていただきました。シンポジウム終了後は展覧会場内へ移動し、生産者の皆さんが丹精込めて育てられた花を使いたいいけばなについて、生けた

華人からテーマなどを語っていただく機会を設けました。日頃なかなか接点のない生産者と華人とを「結ぶ」空間を、それぞれに堪能していただけたようです。(E・Z)

【参加人数150人】

「熊本の華人展」関連イベント 花市場見学ツアー

2012.3.19

熊本の華人展の関連イベントの一環で、花き地方卸売市場の見学ツアーを行いました。普段見る事が出来ない競りや、色彩豊かなチューリップやバラなど、春の花がびっしりとコンテナに積まれているところを見学しました。また、市場の方からお花の流通についての詳しいお話が聞けたりと、参加者の皆さんに大変興味を持っていただいたツアーとなりました。(C・T)

【参加人数14人】



画業40周年記念 葉祥明展—地平線の彼方へ—

2012.4.7-6.17

熊本市出身の絵本作家、葉祥明の画業40周年を記念した「葉祥明展—地平線の彼方へ—」が開幕しました。デビュー作の「ぼくのべんちにしるいとりの原画から、高校時代のデッサン、未発表の油彩、最新作の

「渡り鳥からのメッセージ」の原画まで、約250点の作品をご紹介します。地平線に一本の木というおなじみの構図、美しい色のグラデーションなど、葉祥明らしい作品を思う存分堪能してもらい、最新作では新たな展開も感じていただける会場構成になっています。また、人気キャラクタージェイクにちなんだクッキーやパン、展覧会チケット半券を提示すると各商店街で様々なサービスを受けられるなど、たくさん地元企業のみなさんにご協力いただいた展覧会となりました。(E・Z)

葉祥明 アーティスト・トーク

2012.4.7

「葉祥明展—地平線の彼方へ—」初日に、出品作家葉祥明さんによるアーティスト・トークが開催されました。熊本城が遊び場だったという幼い頃の思い出話から、絵本作家になったきっかけ、展覧会の見どころなどをお話いただきました。トーク終了後には、「心に響く声」や「母親というものは」など数冊を朗読していただき、涙ぐむ人も見られるなど葉祥明さんの魅力満載のアーティスト・トークとなりました。(E・Z)

【参加人数150人】



G III

ギャラリーIII(G III)は、熊本、九州のアーティストを紹介し、応援していくスペースです

Vol.83

熊谷有展
—家族の肖像展

2012.2.29-4.22

長崎県出身、熊本市在住の洋画家、熊谷有展（くまがえ・ありのぶ）さんの個展を開催しました。熊谷さんは白晝会会員・日展会員の画家で、崇城大学教授として後進の指導にもあたっています。

本展は、最新作《育》を含めた15点の作品を展示。1994年の白晝会展での内閣総理大臣賞受賞作から、日展特選、日展会員賞などを受賞した代表作の数々を出品、ほぼ20年の画業を通覧するものでした。(H・T)



熊谷有展
アーティスト・トーク

2012.3.4



1990年代の作品から最新作までを展示した会場内で開催したトークで、企画学芸員から8つの質問に答えていただく形式をとりました。島原市で過ごした幼少時代や、大学浪人中のモネの《睡蓮》との衝撃的な出会いが画家の道を歩むことを決めたという背景からはじまり、画題について、使用する色について、自身の画業のなかにあるリズムについてなど、非常に興味深い内容のトークが行われました。つい笑みを浮かべてしまったエピソードは、ご家族をモデルとした母子像を描く時に、「俺も一緒に！」という意識がついて出て、くまのぬいぐるみ(熊谷という名に由来)や、白のYシャツ(通勤時着用)など、自分に繋がるモチーフを様々描き込んでいるというもの。会場の皆様と作品を前に「どれがそのモチーフでしょうか？」などクイズを行ったりしました。会場からは、「作品と出会うことで元気ができました」、「定年後に絵を始めた自分にもぜひ指導していただけたらいいな」などという作品に感動したファンの声が続々と上がりました。(H・T)

【参加人数40人】

「熊谷有展—家族の肖像展」
関連ワークショップ
「家族の肖像」を描く

2012.3.25&4.1



熊谷有展関連ワークショップとして「家族の肖像」を描くを行いました。これは、保護者と子供(小学生・高校生)の組み合わせでお申し込みいただいた方々が、お互いを描き合うその姿を、崇城大学の熊谷研究室の学生さんが描く、という内容です。2回の開催で、15組の方々が参加されました。おじいちゃんとお孫さんのペア、お父さんと子供のペア、ご家族まるごと参加というグループもありました。「こどもは絵を描くのが好きなんです」と、最初は緊張気味の方もいらつしやいましたが、次第に集中して時間ぎりぎりまでつかって力作を完成させていました。



での開催でしたが、小学生の参加者も全く集中力を切らさず、保護者の方と素晴らしい作品を完成させていました。参加者の方からは、「こんなにじっくり子供の・孫の顔を見たのははじめてでした」「ひさしぶりにじっくりと上の子と会話できました」などの声があがっていました。保護者と子供がお互いを見つめ合いながら、会話しながら絵を描く、そこに漂う親密で真剣な空気は、ただただ感動するものがありました。

このワークショップは、熊谷さんの指導のもと、崇城大学の熊谷研究室の学生さんたちが、参加者を描く・指導するという役割を担いました。初回はとにかく緊張・とにかく一生懸命、という感じでしたが、2回目は「どうしたら参加者に、絵を描く楽しさを実感してもらえるか？」というところを意識するようになっていた姿が見受けられました。このワークショップを通じて、学生が市民と接する機会をつくることになりました。参加者と学生の作品は、熊谷展会場前に会期最終日まで展示しました。会期終了後、学生の作品は参加者に贈呈しました。(H・T)

【参加人数34人】

ART DE GYAN

アート・どぎゃん。

*熊本弁でアートはどうなの? という意味です

第13回 書芸「風」展

アートのスペース大宝堂

熊本市中央区上通町5・6

TEL 096・354・2155



日展会友の書家丸山三千代さんが主宰する書道展で、26人が約60点を展示していた。東日本大震災からの復興を願う想いや歌等を作品にして

いるものも見られた。丸山さんは「風はこぶ」を屏風に力強く大書したり、黒い和紙にプラチナの墨で文字を書いたりして書表現が新鮮でモダンで美しく感じた。会場は、自分なりの言葉や文字、想いが表装まで工夫がみられ楽しい風囲気になっていった。高杉普作の直筆和歌や文化功労者の成瀬映山さんの「夜雨」も賛助出品されていた。(S・K)

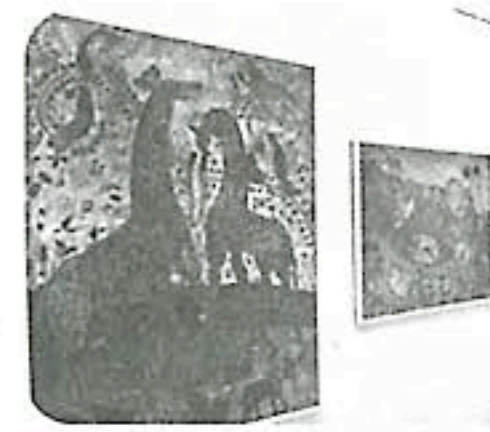
2012.2.15-20

小島恵美子展

ギャラリーカフェアーク

熊本県中央区上通町5・46上通イーストンビル3F

TEL 096・352・3308



山鹿市出身の画家、小島恵美子さんの個展。油彩を基調とした大作から顔彩中心の小品まで幅広い作品が並ぶ。そのなかでも特に目を惹くのは、緻密な線描と、クレヨンや木炭、水彩なども細かく丁寧に組み合わせることで生まれる繊細で美しい色彩。細い、引つ掻くような線で様々な文様や動植物が描きだされ、イメージナルで魅力的な世界が展開されている。(ケニア)

2012.4.24-29

織村布・布・布 orimura fu.fu.fu... 展

熊本伝統工芸館 2階展示室A

熊本市中央区千葉城町3・35

TEL 096・324・4930



田仲一美さん、上野良子さん、荒木伊保里さんの女性作家三名による織物の展示。会場には涼しげなストールやマット、洋服がならぶ。田仲さんは藍染めを主体に肥後まわりで使用されるカラフルな草木染木綿糸を差し色としたお洒落な作品を作られる。作品を織機から外すとまた違う印象になるところが難しいとのことだ。上野さんは幾何学的な模様を幾重にも重ねて織られた根気のいる作品を作られる。ご本人もイメージが形になった時が一番嬉しいとのこと。荒木さんは、洋裁の技術を活かし、裏地にもこだわった帽子やバッグ、ご自身で染めた麻糸とイ草を使って座布団も作られている。ニーズに合わせた作品作りを目指して、何にでも挑戦したいということだ。

2012.4.24-30

MUSEUM INFORMATION

びぶれす熊日会館 10周年イベント

2012.4.8



美術館の開館に一步先立つて開館したびぶれす熊日会館の10周年を祝うイベントが、4月6日〜8日までびぶれす広場で行われま

した。美術館が担当した8日は、熊本市の邦楽コンクールの記念演奏にはじまり、桜井館長と学芸員による展覧会の見どころ紹介、ミュージアムショップの葉祥明グッズの出張販売や、ホテル日航熊本、スイスとコラボしたジェイクのパンやクッキーの試食販売も行われ、盛りあがりしました。(A・S)

3・11への メッセージ展示

2012.3.5-11



2011年3月11日に東日本を襲った大災害を忘れないために、1年後となる2012年3月11日までの1週間、美術館エントランスにメモリアルボードを設置し、被災した方々へ

向けたメッセージやコメントを来館者の方々に残していただきました。距離的には

遠く離れた九州ですが、あの日に感じた思いをこれからも忘れないよう、美術館活動の中で伝えていければと思います。(A・S)

2012.2.25-3.11



第17回熊本市シルバー文化作品展を開催しました。今年も多くの方々の絵画、彫刻、書、工芸など多彩な作品約190点を展示しました。作品からは、出品者の方々の、ものを作る

ことに対する生き活きた喜びと、作り手の方々のパワーが伝わってきます。出品者同士、ご家族やお友達、近隣の方々が作品の感想を楽しくおしゃべりしながら、観賞される姿も大変印象的でした。(A・A)

第32回 熊本市中学校造形展

2012.2.25-3.11



「第23回熊本市市民美術展熊本アートパレード」の同時開催で、第32回熊本市中学校造形展をギャラリーIIで開催しました。今年も熊本市内から38校の参加があり、水彩画やポスター、木工作品など美術の授業や部活動の時間に制作された力作が並びました。

(A・S)

ダウン症の天才書家 金澤翔子展

鶴屋百貨店東館7階鶴屋ホール
熊本市中央区手取本町6・1
TEL 096・356・2111

2012.3.28-4.3

テレビ等でも紹介されている今話題の「金澤翔子展」を覗いてみた。ダウン症というハンディを抱えての親子の奮闘ぶりには頭が下がる思いがした。

なかなか好感の持てる作品があった。展示会のチケットに使われている「共に生きる」のようなりキミが表に現れた書より、やや飄然(ひょうぜん)とも見える作品に共感した。つまり、屏風仕立ての「寒山詩」のうち「山」の象形文字をバックにあしらって、淡墨で表現した「重巖我卜居 鳥道絶人跡 庭際何所有 白雲抱幽石」や、「色即是空 空即是色」「風神雷神の風神」。それに小さい作品で「月光」等の風格が良かった。

NHK大河ドラマのタイトル「平清盛」も程良いアレンジが魅力的で、以前の「天地人」や「龍馬伝」などより感じが良かった。(T・M)

松村球仙・古稀展 並びに有志一同展

荒尾総合文化センター
荒尾市荒尾4186・19
TEL 0968・66・4111

2012.4.13-15

荒尾市で、書家として指導者として活躍している松村球仙さんが球仙書道会の有志48人の門人展を併設して「古稀展」を開いた。荒尾市内

で多くの書道教室を運営している実力者である。雅号で想像できるように人吉の出身で、大東文化大学の書道科で学んだ人である。ちなみに、現在大東文化大学OB熊本県人展の代表幹事である。

今日の書道界で、多くの書家が漢字か仮名かに偏る傾向が見られる中で松村球仙さんは、篆書研究も含めて、漢字も仮名も達人な珍しい人である。当然「漢字仮名交じり文」の作品が安定している。

学生時代に、仮名界の重鎮・熊谷恒子女史に学んだ実績が、今回の「古稀展」にも見事に生かされていると思っただ。書道展としてはあまり例を見ないが、松村さんは参観者のために、作品に「釈文(読み)と意味」を細字で書き加えている。これが実に巧いと感心した。

氏は、先ず日常生活に必要な実用書が書けるようになって、余裕が出来たら表現の巾(はば)を広げさせる。門弟に中央展など無理をさせない方針で、球仙書道会展も希望者のみで隔年開催にしているという良き指導者である。(T・M)

第4回 山鹿湯の端美術展

旧山鹿豊前街道界隈16会場

2012.4.29-5.6

山鹿・湯の端美術会主催による第4回山鹿湯の端美術展は「ひろがって行く」をテーマに、旧山鹿豊前街道界隈の16会場にて開催されました。ながふちなほみさんによる蝨の

立体刺繍(会場：百花堂)は、ひっそりと存在しながらも色鮮やかな生命力を発していました。ナカムラ佳子さんの鉛筆画(山城家は、濃密な筆致で自分の世界に入り込んでいくような世界が作り上げられていました。



森英顕さんによる樟の彫刻(天聴の蔵)は、大庫蔵では高い天井の蔵の中に上昇し、広がっていきような動きを感じさせる(空間・海)、東庫蔵では地に溶け込んだ安定感のある(空間・里)が置かれ、空間との関係性が際立っていました。

文林堂児童 絵画教室の子どもたちの作品と野田竜太郎さんの水墨画(堀家)は、開放的な展示で、弾みのある子どもたちの作品が楽しいで、野田さんの風情のある作品と対をなしていました。



松本寛庸さんの色鉛筆画(蔵)は軽やかな色面が広がり、子どもたちは虫めがねを片手に、細部までじっくりと描かれた作品を楽しんでいます。(Y・H)

Visitor's letter

来館者のみなさんからのメッセージ

アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します

アートパレード・熊本市中学校造形展

・誰でも出品できるので、とてもいいとおもいます。沢山の方の絵に色々な思いがこめられていてよかったです。絵や立体の説明があったらもっといいと思いました。(熊本市、50代、女性)

・量も多く楽しかった。中学生の若さもすばらしい。(不明、50代、男性)

西原理恵子博覧会 バラハク

中学生の頃「まあじゃんほうろうき」の頃からのファンで生原稿を見れたのは嬉しかったです。美術館の場所が少し分かりにくくもう少し案内掲示等があると助かると思います。(福岡県、30代、男性)

編集後記

開館10周年を迎える新年度、AKLも紙面の全面リニューアルを行いました。読みやすい・わかりやすい紙面づくりを今後もこころがけてまいります。

最近、長距離飛行機での移動中にみた映画「ミッション・インポッシブル/ゴーストプロトコル」に登場したBMWのスーパーカーをみて、昔子供が夢見たいわゆる「21世紀の夢の車」というものがすでに現実になったのか、という想いを抱きました。また、ニューヨークでスペースシャトルのエントリープライズ号が博物館公開されるなど、かつての夢や、夢そのものだった宇宙が、身近リアルとなつていきます。

次なる10年にむかって、美術館はどのような夢を見ながら進んでいくのか、市民の皆様とともに構想していきたいと思えます。

編集長 富澤治子

【執筆後記】* 原稿の文末にイニシャル表記

兼城昌山(書道家)(S・K)

森山淡草(書道家)(T・M)

本田代志子(熊本市現代美術館主任学芸員)(Y・H)

蔵座江美(熊本市現代美術館主任学芸員)(E・Z)

富澤治子(熊本市現代美術館主任学芸員)(H・T)

坂本顕子(熊本市現代美術館主任学芸員)(A・S)

芦田彩葵(熊本市現代美術館学芸員)(A・A)

藤本真帆(熊本市現代美術館学芸員)(M・F)

高橋知江(熊本市現代美術館学芸員)(C・T)

濱川倫子(熊本市現代美術館学芸員)(N・H)

丸吉ゆかり(熊本市現代美術館学芸員)(Y・M)

ART KISS LETTER アートキッスレター

TEL: 57初夏号(2012年5月) 【無料】

発行人: 桜井武

編集: 富澤治子

デザイン: 石井克昌(MOTOSHIKI)

印刷: シモダ印刷

発行: 熊本市現代美術館

860・0845

熊本市中央区上通町2・3

電話 096・278・7500

ファックス 096・359・7892

http://www.cank.or.jp/

【次号は盛夏号(7月末発行予定)】

WORLD NEWS

シドニー、ウェリントンのアートシーンから



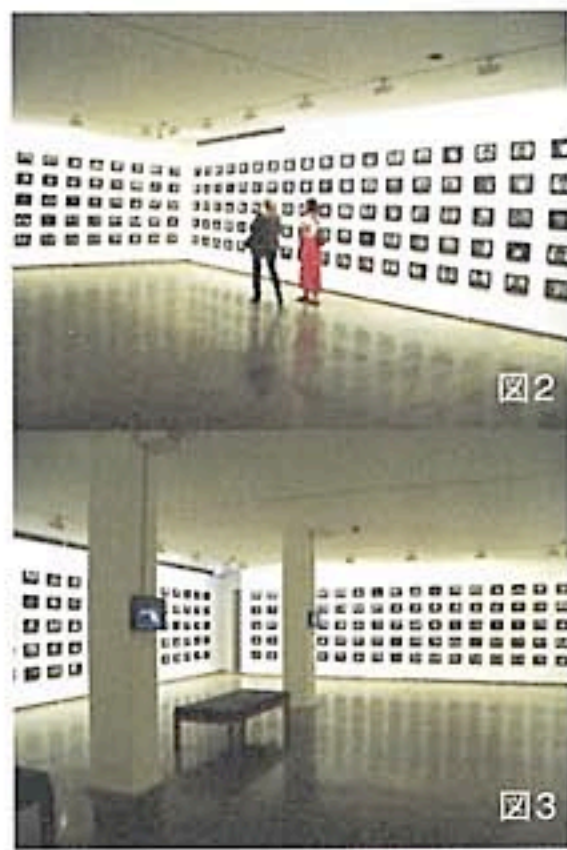
オーストラリア、シドニーのオーストラリア現代美術館 (MCA Australia) (図1)は、館の増改築が完了したそのこけら落としの展覧会として、「Marking

Time」展を開催している(2012年3月29日〜6月3日)。11人のアーティストによるグループ展だが、そこに当館収蔵作家である宮島達男も参加しており、当館収蔵の《Death Clock in CAMK》の次なる展開形態としての《Death Clock》が出品されていた。筆者が《Death Clock》とは何かについて展覧会カタログに寄稿する機会を与えられたという幸運もあり、展覧会場へ足を運んだ。

「時間」をテーマにした展覧会場は、「時間」というものの持つ様々な側面を浮き彫りにする作品が厳選されて構成される。出品作家は国際的な活躍をするアーティスト、ト、オーストラリア出身のアーティスト、アボリジニ文化を持つアーティストという方面から選択され、シドニーでの開催というローカリティを打ち出していた。展示空間はそれぞれの作品そのものの形態と作品にこめられた意味の近似でもって順序付け、全体として美しい連なりと調和が生み出されていた。

宮島の作品は、1万を超える入力データから600人分を写真にプリントし、壁面を埋め尽くすように展示。3つのモニターで入力者の決めた死亡希望時刻へのカウントダウンスクリーンが実際に行われる様子を映していた。熊本で入力されたデー

タも数多く確認でき、まさに「時間は過ぎた」という深い感慨をもって鑑賞することができた。(図2・3)



MCA Australia は今回の増改築で最も

充実を図ったのはワークショップルームで、かなりの広々としたスペースを用意していた。五感に訴える作品(ミレーの《落ち穂拾い》を参照したエミリー・フロイドの作品《The Garden》)。木製のブロックを用いて人物や植物などが抽象的に表現され、触ったり匂いを嗅いだり自分で物語をつくったりすることを促す)や点字がプリントされたファッシュショナルなクッションが設置され「秘密のメッセージを送り合いましよう」と自然に親しみがもてるような工夫もされていた(図4)。イースター休暇ということもあり、何人かの子供が館蔵品をモチーフとした創作ワークショップに参加していた(図5)。土日祝は常時オープンするというサービスを今後展開するとのことだった。



常設展示室は1・2階、作品にはアボリジニ文化と歴史についての思考を促させる作品が数多く展示されていた。印象的だったのがヴァノン・アーキーの作品《Fantasies of the Good》(図6)で、1930年代の白人同化政策のもとで、アボリジニの人々が名前ではなく番号として登録された写真から、作家が曾祖父と祖父を見つけ出し、一族をみつけたし、それをもとに鉛筆で肖像画を描いたもの。負の歴史を個人的なものとして取り扱いつつ、なおアートとして普遍的な強度を保つ



作品を、国立の美術館として収蔵・展示するということについて深く考察を促す作品だった。ちなみにすべての展示は無料で観覧できる。

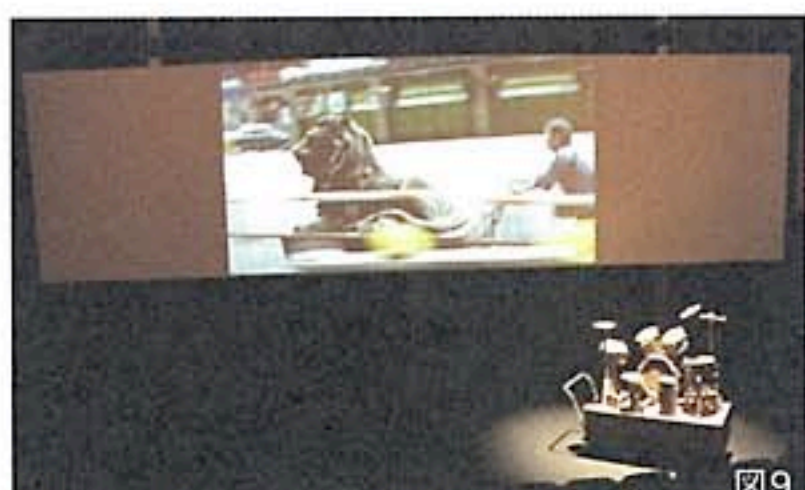
ニュージーランド、ウェリントンの国立美術館博物館テ・パパ(図7)では、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバートのミュージアムの収蔵品による特別展「The Wedding Dress: 300 Years of Bridal Fashion」が開催されていた。英国王子ウィリアムとケイトの結婚に関連する企画であり、ロンドンとウェリントン間の精神的距離の近さをリアルに感じさせるものだった。一方、マオリ文化の再評価を十分に積み重ね、肯定的かつ大きな存在である

ことを自然に示す収蔵品紹介や言語表記も会場のすみずみに表れていた。

シティ・ギャラリー・ウェリントン(図8)では、ニュージーランド現代彫刻のグループ展「Obstinate Object」が開催されており、アジア系作家ユック・キン・タンの作品群(図9)が眼



をひいた。板段ボールを用いて制作した彫刻作品とビデオ作品をセットにすることで、その作品が街中に引きまわされるなかで市民にどのような目で見つめられ、どのような意味合いで存在し、どのような意味を今この作品が展示される美術館で鑑賞する人々に伝えるのかというところに踏み込む作品だった。作品を通じた市民とのコミュニケーションというものを非常に冷静に浮き彫りにさせているのが特徴だった。シドニーとウェリントン、ともに多民族



なった。(H・T)

国家であることが、現代アートのシーンのなかにも豊かに深く内在していることを非常に自然に示している点が強く意識に残り、これからのみずからの在り様を内省する機会と